

■松平家忠 徳川氏の家臣で深溝松平家4代当主。戦国武将の生活や当時の有力大名を知る上で貴重な史料「家忠日記」を遺した。

まつだいらいえただ
大陸邦民事件1555＝

三河国額田郡の深溝城で、**深溝松平家3代当主松平伊忠と鶴殿長持の娘の長男**に生まれる。
その後、弟4人、妹4人が誕生。**深溝松平家**には、曾祖父の代に、宗長が訪れて以来、連歌趣味の伝統があり、父の弟で、最も地位の高く、連歌の嗜みもあった松平規定は、のちの「日記」に頻繁に登場する。

川中島の戦終1564＝**9歳**：家忠が元服した頃の深溝松平家は、本家である徳川家康に服属し、吉田城代酒井忠次の指揮下にあった。

織田信長入京1568＝13歳：父伊忠は、姉川の戦い、石山合戦始・1570＝15歳：三方ヶ原の戦いで活躍、室町幕府滅亡1573＝**18歳**：この間、刈谷城主水野信元の弟忠分の次女を室に迎え、***長篠の戦いには、父に従い従軍、酒井忠次率いる****徳川山攻撃軍に加わった父が戦死、深溝家の断絶を恐れた父の説得で別行動し命を救われ、家督を引き継ぐとともに、その日に何が起こったかを簡潔に書き綴った日記をつけ始めた**と思われる。**長篠の戦**・・・1575＝20歳：「日記」は、その後も続く武田軍の動きから始まる。深溝近くの領主、竹谷氏、形原氏、とくに母の実家である鶴殿氏との交際が詳しく記され、機会あるごとに、菩提寺本光寺(曹洞宗)を訪ね、住職と歓談。

安土楽市楽座1577＝22歳：上杉謙信没・1578＝23歳：幸若舞の舞人が、以後毎年のように来訪。長妹の嫁ぎ先松平甚太郎が登場、その後の3人の妹の結婚相手とも深く交流。岡崎城主になった(家康の嫡男)信康に仕える医師久志本法安とは、岡崎に詰めて城普請するうち、連歌もあつて、深い付き合いになる。勝頼侵攻で、遠江に出陣、城の普請や交替番など忙しいが、領主らの振舞が息抜きになるのは以後変らない。**この年も堤防決壊で修築したように、頻繁に氾濫する広田川に対応して、土木に技能が培われ、戦そのもののより、城郭の普請や補修などに従事するようになる。**

安土教会許可1579＝24歳：領内でよそ者の殺人事件。信長の命で、家康が自らの正室築山殿と信康を死に追いやったが、単に、両人が死去したことを記すのみで、家康はじめ一族にとってマイナスになるような記述は慎重に避けている。勝頼が江尻(のちの駿府)まで来たとの情報で浜松に出陣、勝頼の退却で終わる。この年の記載が最初であるが、毎夏、鮎などの川狩りを、毎秋には鷹狩りを楽しみ、それ以上に、毎冬、池での鯉や鯡漁に凝り、いづれも家臣や親類に振舞い、年末には、借金の清算と歳暮を欠かさず、**連歌については、余程のことが無い限り、定期、非定期に関わらず、一族から、近傍領主、家康家臣まで、様々な連歌会を生涯続けて行く。**

石山合戦終・1580＝25歳：皆既月食が発生、この年は、一年に三度も日食・月食があったばかりでなく、彗星まで出現している。忠次命で、勝頼の高天神城包囲の付城(前線基地)普請し、翌年には落城、武田氏が遠江最後の砦を失う。**パリンヤノ**/謁見 1581＝26歳：病床にあった甚太郎を見舞いに行くも死去。母の病で、法安を迎えるも死去。**この年から何回か平家物語を語る琵琶法師の座頭が来訪するが、パリンヤノとの関係で、3回出てくるキリスト教の宣教師も座頭としてしているのが面白い。キリスト教に関心を寄せ、キシタンが人を喰うという噂との関係で聞いた人魚の絵を想像で描き、コメントをつけているが、人魚伝説に関する記述として重要。**

本能寺の変・1582＝**27歳**：長男(男猿)が誕生、盛大な出産祝い。'西風強く渡船が動かず池田に泊まった'など、農業や軍事に影響する天候については、細かく記している。**信長と同盟した家康に従い、甲州征伐に参加、武田氏滅亡で、甲府の善光寺を見物。三河を通して帰陣する信長一行のため、本栖で、茶屋を建設し坂道を普請するが、"御成"と記していることから、すでに信長を将軍扱いしていたことが分かり、また、信長の家臣で黒人の弥助を目撃、'身の丈六尺二分、身はすみのごとく'など、伝説を裏付けけるものである。信長は、家康を安土に招いてもてなしたが、その際、飛脚を遣わして家康のご機嫌伺い、のちに来た返事から、自ら茶白を引く信長のユーモラスな姿が窺える。その直後に起きた本能寺の変もわずか2日で知り、危険を避けて迂回して帰国する家康を、知多まで迎えに行っている。忠次からの命で、北条氏直と対決すべく、信濃高嶋城に出陣、和睦が成立、人質交換に立ち会い後、許可を得て、深溝に帰陣、翌年にかけて、久しぶりに平穏な日々。**

賤ヶ岳の戦・1583＝28歳：屋敷の蔵に盗人が侵入し犯人を追跡。長妹が、家康の御意で、跡部昌出と再婚、浜松まで盛大な嫁入り行列。**「それまで、単に"家康"と記していたのが、"家康様""殿様"の語も使うようになる。忠次からの命で、川中島に出陣し、家康の娘の氏直への嫁入りに立ち会い後、駿府の番をし、長久保城を普請。この年は大雨で洪水の被害甚大、普請などの負担免除を訴えて認められた。**

長久手の戦・1584＝29歳：馬が病気になる、馬医者に来てもらう。始まった小牧・長久手の戦いでは、家康と秀吉の動向に関する情報が大部分、膠着状態に陥り、陣中で退屈し、諸事をこなし、終戦後、深溝に帰陣、

豊臣秀吉関白1585＝30歳：所領で、徳川氏家臣が殺害され、検使が派遣される。**駿府城普請で滞在中、家康の重臣石川数正が秀吉のもとに出奔する大事件が発生、即座に岡崎城に普請出仕して、家康から褒められ、鷹狩りの獲物を下賜される。深溝に戻って、女供を疎開させた直後、大地震が発生、北国では多数の人馬が死去する大被害、連日余震が続く事態のなか、東部城の普請を指揮、その間、浜松城に出仕し、北条氏政と対面する家康を送る。**

秀吉太政大臣1586＝31歳：元日恒例の家中の礼を自肅し、普請を再開、家康が戻った浜松に出仕後、**講和の証で、秀吉の妹が家康に輿入れ、忠次に振舞の方法を尋ね、行列を池鯉鮒(知立)で出迎え、岡崎まで送ったが、上方の武士との交際が視野を広めることになるとともに、離散していた家族が元に戻って喜ぶ。家康の上洛後は、一日おきに大坂に飛脚を送って安否を気遣い、無事終わると浜松に使者を送って、成功と無事を祝っている。**

パレノ追放令 1587＝32歳：駿府普請。この年の「日記」には、**将棋の局面が描かれているが、現存最古の局面図とされる。刀狩海賊取締**1588＝33歳：疱瘡はやり、法安に来てもらう。駿府普請。家康は後陽成天皇の聚楽第行幸に参加するため上洛の家康の書き立てで、秀吉の権勢を知る。手伝普請の囁失となる天守の材木提供。上方で流行する茶の湯にはまり、茶の湯座敷を作り、道具も揃え、**"数寄"の語を使って喜ぶ。家計は厳しくなっているところに、家康自身から、知行高の50分の一の差出を命じられる。弟玄成が、ともに家康に仕えていた連歌師如雪の娘と結婚。**

・・・・・・1589＝34歳：駿府滞在中の連歌会で、京都の連歌師から点数を貰って喜ぶ。駿府普請命、度重なる普請に反発も、秀忠の母の死去で参上せざるを得なくなる。秀吉と茶々の間に鶴丸誕生で遅れた家康の帰府を出迎え。秀吉が建設中の大仏殿のため、富士山で木引し、富士川で木流しの苦勞する間、秀吉が北条氏討滅を決意、

秀吉全国統一1590＝35歳：小田原出陣のため駿府に出仕し、命じられて舟橋造りや陣普請、秀吉の御成で初対面。ついに降伏し開城、家康に従って城内に入り見物。**家康が関東に移封されると、武蔵国埼玉郡の忍城を本拠とするが、本来、家康の四男松平忠吉に与えられたものの、忠吉が幼少のため預ったもので、その家臣が同居。かつての城主成田氏長とも連歌を介して交流、菩提寺本光寺を忍に移して以前同様に頻繁に訪問、深溝時代交流していた近傍領主らも皆関東に国替えなり、交流は続いていくのも束の間、**

士農工商公布1591＝**36歳**：前年の忍での初仕事は、雁を鉄砲で撃った者を捕らえ磔の刑、北条氏の時代から、鷹狩りの対象となる鳥を撃つことは禁止で、みせしめの刑。城下町での火災、忠吉家臣の武士と商人の間のトラブルなど苦勞するうち、奥州で多発する一揆を押さえるため、家康に従い、忠吉家臣は出陣するも、自分と家臣は忍留守居で済む。この年、**忍で降灰があるほどの、浅間山の大噴火があったことが記されている**

文禄の役・・・1592＝37歳：東の方角に、突然(超新星と思われる)星が出現と記しているが、毎日夜空を眺めていた証。**忠吉が正式に城主になると改めて下総国に移封、小見川の少し南、九十九里との間の広大な干拓地を望む台地上の上代城を本拠とする。家康が名護屋に出陣で、子の秀忠が主のようになった江戸城の本格普請のため、江戸との間を往復する生活になるも、菩提寺本光寺を移設して頻繁に振舞を受け、連歌にも相変らず熱心、**

方広寺大仏殿1593＝38歳：弟新二郎、大叔父玄佐が相次いで病死、世の無常を感じる一方、屋敷に子供用の部屋を設けているのは珍しい。人を誘拐して売り捌いた中間を磔の刑、人身売買は固く禁止されていた。自らの分の年貢米を江戸で売却し換金、米以外の金による決済も始まっている。家康が大納言になり、以後、ほとんど"大納言様"と表記。朝鮮侵略に関わる度重なる賦課に嫌気も、名護屋の家康に飛脚して喜ばれ、**普請の終わった江戸城へ家康の帰還となり、沼津まで出迎え、義務を果たすと鎌倉見物して江戸に戻ったが、借金の利息などで、家計はいよいよ火の車。この頃から、「日記」の欠落が目立つようになり、**

ルノ島通交・ 1594＝39歳：伏見城普請に駆り出されて上洛、里村紹巴ら連歌の師と初対面、秀吉から、羽折と帷子を下賜され、秀吉と二度目の対面、晦日に、京の家康屋敷の番風呂焚き、医師法安と久しぶりの再会や宇治川分流の堤の普請など、**以後は、きわめて断片的かつ日付もあいまいになってしまう。**

関ヶ原の戦・1600＝**45歳**：関ヶ原の戦いの前哨戦として、伏見城の守備に当たり、石田三成ら西軍の挙兵を誘うこと成功するも敗れ、自刃して没した。父に続いて壮烈な最期を遂げたことになる。「日記」はまさに戦国時代の最後の様子を記録したものになり、2020年に、国の重要文化財に指定された。

Wikipedia「松平家忠」を枠に、盛本昌広「家康家臣の戦と日常 松平家忠日記を読む」で大幅に追補、